ONE for ALL 4月号

Vol.65

J-LEASE COMPANY NEWSLETTER

2018 April

世界の風景　ースペイン 世界遺産 サグラダ・ファミリアー

the CEO column

title：
東京証券取引所市場第一部へ市場変更をいたしました。

ジェイリース株式会社は、株式会社東京証券取引所の承認を受け、平成30年3月13日をもちまして、当社株式を東京証券取引所マザーズ市場から東京証券取引所市場第一部へ市場変更いたしました。ここに謹んでご報告申し上げるとともに、皆さまからの格別のご支援、ご高配に厚く御礼申し上げます。

当社は、平成16年2月の創業以来14年間に渡り、不動産賃貸借契約における入居者さま、オーナーさま、不動産会社さまの三者を円滑につなぐ家賃債務保証会社として、ステークホルダーの皆さまと共に歩んでまいりました。

我が国では、少子高齢化、晩婚化といった社会環境の変化や、およそ120年ぶりの民法（債権法）改正などを背景に、賃貸住宅業界における「人的保証」としての連帯保証人制度が機能低下してきております。このような状況下におきまして、当社のような法人による「機関保証」のニーズは、今後、より一層高まっていくものと思われ、社会的責務も一層大きくなっていくものと考えております。

当社は、東証一部への市場変更を契機に、全国への店舗展開をさらに推し進め、全国47都道府県のすべてで各地域に寄り添った営業活動を行うとともに、お客様のニーズにお応えするべく様々なソリューションを提供してまいります。

当社と関わる全ての皆さまにとって、「身近」で「信用」できる業界ナンバーワン企業を目指してまいります。

今後とも、一層のご愛顧、お引き立てを賜りますようお願い申し上げます。

平成30年3月25日
ジェイリース株式会社
CEO代表取締役社長　中島　拓

トップ会談

～「勇往邁進」互いに前進を！～

榎　徹（えのき とおる）
大分県佐伯市出身
1959年生
1974年4月　大分県立佐伯鶴城高校
1977年4月　九州大学（法学部）
1982年4月　大分県 採用
2006年4月　大分県国体局 競技式典課主幹
2009年1月　大分県商工労働部雇用人材育成課参事
2011年5月　大分県企画振興部文化スポーツ振興課長
2014年4月　大分県東部振興局長

中島　拓（なかしま ひらく）
大分県大分市出身
1957年生
1980年3月　中央大学法学部卒
2004年3月　ジェイリース株式会社設立
代表取締役社長就任（現任）
2016年7月　大分南ロータリークラブ
2016-2017年度第39代会長就任
（著書）
「検証　過払い」
「お金を使う人　お金に使われる人」
「よくわかる！　家賃債務保証の知識」

中島社長
本日はお忙しい所お越しいただき、ありがとうございます。
榎社長とは２度目の会談ということで、前回同様、楽しいお話ができそうです。よろしくお願いいたします。

榎社長
まずはその前に、東証一部上場、誠におめでとうございます！新聞で見てびっくりしました。監督や選手達も驚いていましたが、ビッグネームのスポンサーを持つ我々は幸せです。

中島社長
ありがとうございます。当社は平成16年２月の創業ですので、丸14年を経て東証一部に上場することができました。マザーズに上場したのが一昨年の６月ですから、１年と9カ月での市場変更です。会社創立以来、様々なことがありましたが、社員の皆さんの頑張りで何とかここまでやってきました。
とはいっても、ここからが真のスタートです。今後ともしっかりとした数字を出して、更に皆さんに愛される企業を目指してまいります。

榎社長
ジェイリースさんの益々のご活躍を確信しております。また、昨年はＪ2プレーオフには届かなかったものの、１桁順位で終えたお祝いとして、ジェイリースさんからフードベンチをご恵贈いただきありがとうございました。移動式で大変便利でして、フル稼働で使用させていただいております。

中島社長
それは良かったです。大いに活用してください（笑）
ところで、当社の2018年社長訓は「勇往邁進」ですが、何とトリニータの2018シーズンのチームスローガンも同じ「勇往邁進」なんですね！正月から感動しました（笑）

榎社長
私共も大変驚きました。なかなかない偶然ですよね。同じだと聞いて「やばい！」と思ったのですが、中島社長に容認いただきほっとしました（笑）

中島社長
いやいや（笑）こちらこそ光栄に思っていますよ。今年の当社はさらに大きな目標に向かって力強く前進する年にしたいという思いから「勇往邁進」を社長訓としました。これからも家賃債務保証会社のリーディングカンパニーを目指して頑張ります。

榎社長
素晴らしいことです。大分トリニータのチームスローガンは毎年監督と話し合って決めています。私が社長に就任した2016シーズンはＪ3で戦った年であり、「原点回帰」をスローガンとし、大分トリニータを創

立したころの気持ちに戻ろうという想いを込めました。J2へ昇格した昨シーズンはその初心を忘れてはいけないという想いから「初志貫徹」をチームスローガンにしました。そして今年はそこから更に前に進み、「サッカーを通じて大分の活力に貢献する」というクラブの目的を果たすべく、チーム・クラブ・選手・スタッフそれぞれが自らの目標達成に向けて勇気をもってチャレンジしていくという決意を表し「勇往邁進」の言葉を選びました。

中島社長

そうですか。お互いに前進を実感する一年にしていきましょう。ところで当社は、本年からの新しい取り組みとして、実業団スポーツを通じて地域貢献、社会貢献を実現したいという想いから、自社のサッカークラブ「ジェイリースFC」を創部しました。今シーズンは県3部リーグからのスタートですが、チームの監督には2011年から2013年までトリニータに在籍していた永芳卓磨さんにお願いしました。数年後には九州リーグで戦えるようなチームを作っていきたいと考えています。

榎社長はチームをつくる上で重要なこととは何だとお考えですか。

榎社長

チーム内のコミュニケーションが最も重要であると思います。実は私は社長に就任するまでは、プロのチームにおいて監督の重要性はずば抜けて高いわけではないと思っていました。選手は大人でしっかりとした意思を持っていますし、プロなのでそれなりに一人ひとりでうまくやるのではないかと。ですが、やはりどのチームも監督によってチームは変わると言います。

監督と選手のコミュニケーション、そして監督と選手間のコミュニケーションをつめているコーチの役割もまた大きいです。そして私自身、社長という立場から「トリニータというチームが大分にある究極の目的とは何か」という問いを、もっともっと選手と話し合っていかなければならないと考えております。トップチームが強くなるには必ず、会社が強くならなければなりません。サッカーと会社組織は似ているところがあると思います。特にプロサッカーのチームではそうです。一人ひとりにポジションは与えられていますが、臨機応変に対応しなければなりません。

中島社長

なるほど。コミュニケーションはチーム内だけの事ではなく、社長の立場からも選手にかかわっていくことが重要であるということですね。

今年はどんな選手に輝いてほしいですか。

榎社長

もちろん全員にその想いは込めています。若手選手にはもっともっと頑張って、レギュラーの座を奪い取るような勢いで進んでほしいです。アンダー18から頑張っている後藤優介選手には、本シーズンもたくさん得点し、今後チームの大黒柱になって突き抜けてほしいです。あとは、三平和司選手、松本怜選手などベテラン選手たちには、リーダーとしての存在をピッチ上で示してほしいです。

中島社長

そうですか、わかりました。

当社の実業団チームも将来は、プロを引退した選手のセカンドキャリア、仕事とサッカーを両立したい人の受け入れなど、トリニータさんと情報交換、連携を深めていければと望んでいます。

榎社長

うちとしてもサッカーを愛する方々に何か1つの道筋を作りたいと思っていました。大分トリニータに協力していただける実業団チームとの友好は大変ありがたいことです。

中島社長

お互い、連携を図っていきたいですね。最後に今シーズンの意気込みをお聞かせください。

榎社長

最低6位以上でJ1昇格を目指します。もちろん自動昇格が理想ではありますが、最低でもプレーオフで勝ち進んで、J1に昇格することが最終目標です。

昨シーズンはプレーオフに届きそうで届かなかったということにチーム全員かなり悔しい思いをしましたので、絶対に負けないという気持ちでチャレンジします。

特にホームゲームは絶対に勝ちこせるよう頑張りますので、是非応援に来てください!

また本年は東京事務所を開設いたしました。東京に住んでいる大分県出身の方にもっとトリニータを好きになっていただくために、アウェーのツアーの企画も進めています。多くの方に大分トリニータのファンになっていただけるよう頑張ります!

中島社長

「勇往邁進」に込められた強い決意のもと、お互いに頑張っていきましょう。今年も大分トリニータを全力で応援させていただきます。本日はありがとうございました。

寄稿コラム

言葉の不思議

内閣総理大臣及び経済産業大臣事業認定資格
消費生活アドバイザー　水上　宏明 氏

平昌オリンピックで一番印象に残ったのは、日本選手の活躍もさることながら南北朝鮮の合同アイスホッケーチームのこと。活字を読んでいると、南北合同チームは同じ言葉なのに、単語の意味が違ったり通じなくて困ったとありました。日本も戦時中は英語を禁止して、野球のストライクを「よし」、ボールを「だめ」といわせていたので、そんなこともあろうかと。

同じ表音文字をもつ民族が70年以上も分断されていると、文字は同じでも肝心の「音」が違ってしまうようなのです。外国語の聞き取りはまったくだめですが、南と北のアナウンサーの発する音声が違うことくらいはわかります。

これは言葉の進化ということではないだろうか。逆のパターンもあります。ＮＨＫ大河ドラマ『西郷どん』を見ていてこんなことを思いました。例えば、江戸時代の参勤交代が浸透する前。津軽藩と薩摩藩はどうやって意思疎通していたんだろう?

何かで読んだのですが、日本語は表音文字でありながら元は漢文で表意文字なので、まず書面で筆談をして言葉は「候文」で統一してなんとかやっていたとか。時代劇でよく耳にする「ござそうろう」です。参勤交代が始まると、一部のエリート武士は江戸詰するようになって、次第にこなれて通じやすくなったといいます。南北朝鮮語の進化とは逆のパターンです。

今は大正時代に始まったラジオ放送のおかげで、全国どこにいっても言葉で不自由することはなくなりました。筆者も学生のころ田舎の北海道に帰省して地元の友だちとおしゃべりするとき、言葉を戻すのにちょっと気を使っていました。気のせいか最近はほとんど、気にしないでふつうにしゃべっています。地元の人の言葉がNHK語に近づいているからだと思います。

言葉を活字にすると記録に残ります。音声はせいぜい100年くらい前のしか残っていません。方言を見直して発掘する活動もあります。まだ集大成的なものはないようですが、誰かやってもらえないかと思っています。

薩摩と津軽の田舎武士同士の会話がきけたら、と思うとぞくぞくします。

水上　宏明 氏
（みずかみ　ひろあき）

内閣総理大臣及び経済産業大臣事業認定資格 消費生活アドバイザー
日本クレジット協会企画部長を経て現在フリーランスライター。
著書：『クレジットカードの知識』『クレジットの基本』（日経文庫）
『金貸しの日本史』（新潮新書）など多数。
寄稿：「恨みがあるならカネに言え」（コラム）
『日本金融新聞』に2006年から2014年まで231回連載。
その他：『月刊消費者信用』『朝日新聞』などに多数。

ジェイリース
J·LEASE CO., LTD.